

東京工大クロニクル

Tokyo Institute of Technology Chronicle

No. 177

Mar. 1985

主要記事

学部卒業の諸君へ……………	1
大学院修了の諸君へ……………	3
退官に寄せて……………	5

学部卒業の諸君へ

学長 松田 武彦

諸君、卒業おめでとう！

諸君が全国一斉の共通第1次学力試験と本学独自の第二次学力検査という両様の厳しい入学試験を見事に突破して、桜咲き誇るこの大岡山キャンパスに入って来てから早くも4年、人によってはそれ以上の月日が経って、諸君は今日、輝かしい未来に向かって、本学を巣立つことになりました。いま、諸君の胸の中には数々の大学生活の思い出が去来するとともに、若々しい将来への希望が溢れていると思います。本学の学長として、私は、諸君のこれまでの努力に対して深い敬意を払うとともに、その成果である学部卒業を心から祝福します。また今日の日を待ち望んでいられたであろう御家族の皆さんにもお祝いを申し上げます。

諸君は、もともと素質に恵まれた上に、本学において撓まぬ研鑽を積んだ結果、いまや立派な理学士・工学士として世に出て、これからの日本の科学技術を推し進めるべき人材に育ちました。私は学長として卒業証書に署名することによって、そのことを社会に保証できるのを嬉しく思い、また誇りにも思うものであります。

人類社会の未来に対して科学技術の果すべき役割は、重かつ大であり、これを担う諸君の前途には洋々たるものがあります。それと同時に、まさに日進月歩の科学技術の発展を支え、その第一線を押し進めるべき諸君の責任も、また重かつ大であります。諸君は、このような社会の要請に応えるべく、どうか、絶えざる努力とともに、勇往邁進の気概を以て、事に当って下さい。

諸君の中には、直ちに社会に出て活躍する人もあり、また、研究を続けるため大学院に進学する人もあるわけですが、いずれにしても、これから未知の世界に挑戦することに変わりはありません。また、留学生諸君の中には、帰国して同胞のために留学の成

果を役立てようという人もあります。どの場合にも、私は諸君が本学で身につけた合理的思考を實踐して、科学技術の未来の発展に寄与することを疑いません。

しかし、残念ながら科学技術には光り輝やく面とともに、影の部分、問題の部分があります。すなわち、核兵器の問題、あるいは資源枯渇・環境破壊の問題などがそれであり、要するに、私たちが、理工学の研究・実践において、あたり前と思ってきたことが、社会から根源的に問い直されている面があり、このため社会には科学技術不信の声も一部聞かれます。諸君には、理工学の最高学府を卒業した者として、こうした問題に対して本質的かつ建設的に答える用意が必要であります。

諸君が本学で学んだことは、各専門分野の基礎知識であります。科学技術の世界では、進歩・発達が早くて、いま身につけている知識が何年もしないうちに古くなってしまっておそれがあります。ですから、諸君には常に新しい知識を自分の手で開発・獲得していくことが要求されます。そこで役に立つのが、理学・工学の方法論であります。すなわち、先端知識はすぐに陳腐化することを覚悟しなければならず、その意味では、貯め込んだ知識で勝負する人はすぐに行き詰まるのに対して、そうした知識を獲得するための方法をマスターした人は、ちょうど、汲めども尽きぬ泉から水を汲むように、次から次へと新しい知識を獲得することができるでしょう。諸君は、本学における学習で、そういう方法論を鍛えたのでありまして、いわば“学び方”を学んだわけであり、この点、特に諸君が苦勞した卒業論文作成の過程が大きく貢献しているはずであります。

こうして、諸君は自ら学ぶことを身につけたわけですが、同時に他から学ぶことも大事であります。諸君の周囲のあらゆる人が、いわば先生であり、諸君の側に他から学ぶ心掛けさえあれば、諸君は、井

の中の蛙にならずに済むはずであります。さらに、もう一つ生涯学ぶ心掛けが必要であります。直ちに就職するにせよ大学院に進学するにせよ諸君の仕事というのは、すなわち、次から次へと現われる新しい問題との格闘の連続であります。そして、そうした問題は、多くの場合、諸君が前に得た知識、いま身につけている知識だけでは処理しきれないようなものでありましょう。そういう意味で、諸君に生涯学ぶ態度がなければ、諸君は間違いなく仕事に取り残されることとなります。

こうして、諸君が次から次へと新しい問題に取り組むにあたって、常に忘れてならないのは、性急に解答を求めてバタバタするのではなく、もっと“問題本位”にものを考えるということです。すなわち、いつも、まず「何がほんとうに問題であるか」とか、あるいは「今の時点で、ほかを差し置いてこの問題を取り上げるのはなぜか」とか、さらに「この問題を解決することに、どういう価値や意義があるか」とかを問う姿勢が大切であります。残念ながら、わが国の学校教育の内容や入学試験の制度は、あまりにも“解答本位”であります。つまり、徒らに他から与えられた問題を解くことにばかり汲々として、問題そのものについて、その発見・発掘・位置付け・評価、さらには解ける形への設定といったことに関する教育・訓練がおろそかにされているような気がしてなりません。そういう意味で、諸君には、“解答本位”から“問題本位”への転換、問題の“解き屋”から“作り屋”への変身を心掛けてほしいのであります。

誤解のないように言っておきますが、問題の作り屋になれと言っても、決して諸君にことさら周囲に

波風を立てなさいと奨めているわけではありません。むしろ、諸君には会社などの組織の中に入ったら自己主張と協調性とを適度に調和させて、組織人として賢い行動を採ってほしいと願うものであります。

それから、諸君は天下の東京工業大学の卒業生でありますから、どこへ行ってもエリート中のエリートとして扱われることが予想されます。エリートたる者、すべからく独立独歩の気概を胸に抱いて進むべきですが、現代の複雑な世の中で仕事をしていくに当っては、一人だけではどうしようもないことが多く、どうしても諸君の周囲の数多くの人たちの助けをかりなければなりません。そうした人びと、特に諸君を下から支えてくれる人びとに感謝する気持と行動が必要でそれがエリートとして遇される諸君の必掛けるべきことでありましょう。

さて、ここに掲げられている二つの長旗は、本学の創立百周年を記念して、本学の同窓会である蔵前工業会の御好意によって寄贈されたものであります。

これらの旗の一方は、理学の目指す「究理」を表わし、もう一方は、工学の目指す「精技」を象徴しています。これらの旗には、本学が理学と工学との調和のとれた大学として発展するようにとの願いとともに、本日卒業する諸君の前途を祝福する意味も込められているものであります。

諸君、卒業、ほんとうにおめでとう！

日本の科学技術の輝かしい未来は、若い諸君の手の中にあります。どうか、くれぐれも健康に注意して、元気一杯、夢のある未来に立ち向かって下さい。

これを以て祝辞とします。



大学院修了の諸君へ

諸君、大学院修了おめでとう！

諸君は、最も短い人で2年、長い人は5年もしくはそれ以上の歳月を、本学大学院の理工学研究科あるいは総合理工学研究科の各専攻で過ごしてきましたが、蛍雪の功空しからず、いまや学業成って輝かしい門出の日を迎えました。私は、学長として諸君の長年にわたる努力に深い敬意を払うとともに、その成果である課程修了に満腔の祝意を表するものであります。また、今日の日を待ち望んでいられたであろう御家族の皆さんにも、心からお祝いを申し上げます。

国土が狭く、資源に恵まれないわが国にとって、科学技術こそが生きる道であることは、私が指摘するまでもありません。科学技術立国ということが、わが国で早くから唱えられてきたのも、まことに尤もなことであります。諸君は、わが国の理工系最高の学府である本学の、しかも大学院に学ぶというすばらしい条件に恵まれたのですから、単に科学技術の先人の業績を伝承するにとどまらず、科学技術の最先端をさらに押し進める任務をも帯びており、その役割は輝かしくかつ重大であります。また、留学生の諸君は、それぞれの故国に帰って、日本からの技術移転の先駆けを勤め、また日本と故国との間の文化のかけ橋となり、友好の絆となることが期待されていますので、その任務には大きな価値があると同時に、重い責任を伴うことであります。

新修士諸君は、学部レベルの基礎学識を一步超えた学習の成果として、学部卒業生とはひと味ちがう力量の期待を背負わされて社会に出ることになります。幸いなことに、理工学の修了修了者に対する社会の評価は、年を追って高まっていますが、諸君には、高度の科学技術の世界におけるプロフェッショナルであるという期待が寄せられていることに思いを致し、その期待を裏切らないよう精進して下さい。

修士課程からさらに博士後期課程に進学する諸君は、わが国におけるそれぞれの専門分野の将来を背負って立つよう意思決定をされたわけであります。学問の道というものが決して生易しくないことは、諸君が研究室の先輩の辛苦を親しく目のあたりにして、痛切に感じているところだと思いますが、どうか、苦勞にめげず大いにチャレンジ精神をかき立て

てがんばって下さい。

また、新博士諸君は専攻分野における独創的研究によって、従来の学術水準に新しい知見を加えるとともに、研究者として自立して研究活動を行なうのに必要な能力、およびその基礎となる学識を身につけたということによって認定されたのであります。このことは、同時に私たちのアカデミックなコミュニティに新進気鋭の諸君を同僚として迎え入れることであり、これも、また、学長の職にある私として大変喜ばしく誇らしいことであります。

ところで、世間には、核兵器問題・資源問題・環境問題などを誇張することによって、科学技術の影の部分をもことさらに強調する向きもあります。そうでなくても、私たちが、組織のため、世のために、善意からよかれと思って実行した科学技術上の方策が、思いがけないところでマイナスの効果をもたらした例がいくつも数えられます。理工学の大学院を修了する諸君には、こうしたケースについて科学技術に対する社会の批判を冷静に受け止め、さらに、必要があれば効果的な説得を行い得ることが期待されます。この期待に応えるためには諸君が自己の専門分野についてはもとよりですが、一般に科学技術の社会的位置付けや、人間とのかかわりについて日頃から意識して想を練っておくことが要請されます。

さて、諸君が研究生活を通じて身を以て経験したとおり、大学院における学習においては、学部時代に比べて、格段に高い自主性ないしは自律性が要求されたはずであります。すなわち、大学院では既にきちんと設定された上で諸君に与えられる問題を受け取って解くだけという、いわば“解答本位”の姿勢から脱却することが望まれたはずであります。すなわち、自分で問題を発見・発掘することや、自分の専門領域におけるその問題の位置付けや評価をすることや、さらにその問題を解ける形に設定することなど、言ってみれば“問題本位”のアプローチの仕方が求められたわけです。諸君が心血を注いで作成した修士論文や博士論文においても、そうした問題の把握や設定の仕方における独創性、つまり諸君の問題の問い方の独創性がまず認められ、然るのちに、その問題の解き方の有効性が評価されたものと

言うべきでしょう。

ところで、仏教の僧の修行について、その過程を三段階に分けて、これに、それぞれ修・破・離という名がつけられています。学問の修行についても、同じようなことが考えられます。まず、先人の教えに忠実に従がう“修学”の段階、次いで先人の教えの殻を破る“破学”の段階、最後に先人の教えから離れて独自の境地に至る“離学”の段階があるというわけです。最後の段階は、独立して自分の学問を立てるという意味で“立学”と呼んでもいいでしょう。諸君の場合について言うと、大学院におけるスクーリングの一部が修学に当り先人の論文を批判的に読む部分で修学から破学に一歩足を踏み入れたわけですが、諸君の現在の位置は、学位論文の独創性が認められたところですから、破学の境地に深く踏み込んだところでしょうか。そして、特に博士後期課程を修了する諸君には、今後も努力・精進を積んで離学ないし立学の域に達し、自らが立てる学の喜びを感じる境地を目指すことを希望します。

新博士諸君に、もう一つお願いしたいことがあります。諸君に授与された博士の学位は、諸君が今後ひとりで立派に研究をやって行けるといふ、いわば保証書であります。このことは、とりも直さず、それぞれの専門領域の学問を深めて、学問体系の一翼を担い、さらにその最前線を押し進める義務を諸君に課するものであり、その意味で、諸君の仕事はこれから本番であるということ深く心に刻んでほしいということでもあります。

しかし、専門の学問を一層深めるというのは、決して狭い領域に偏ったり、閉じこもってしまうことではありません。むしろ、視野はますます広げて、その中で自分の専門を適切に位置付けることが要求

されます。ですから、博士はまさに“ひろし”でなければならず、学士よりも修士よりも広い守備範囲を持たなければいけません。つまり、どんな問題が来ても、とにかく一人で科学的アプローチを実践するのだという気概を持って、事に当って下さい。

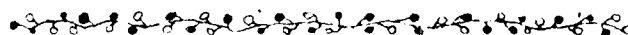
ここに掲げられている二つの長旗は、本学の創立百周年を記念して、同窓会である蔵前工業会の御好意によって寄贈されたものであります。その一方は、理学の目的である「究理」を象徴し、もう一方は、工学の目的である「精技」を象徴しています。これらの旗は、本学が、わが国ばかりでなく、世界における理工系大学の雄として、理と工との一層調和ある発展を見せることを期待するとともに、本学を巣出つ諸君の前途を祝福する気持も込められていると思っております。

諸君は、この百年の輝かしい伝統を誇る東京工業大学の、しかも大学院の出身者として、どこへ行ってもエリート中のエリートとして遇されることでしょう。諸君は、そうした周囲の期待に応えるよう何事によらず、毅然とした独立独行の精神を持って当るべきですが、一方、現代の科学技術の実践は、数多くの人の協力がなしには達成できません。ですから、諸君にはそういう周りの人たちとりわけ諸君の仕事を下から支えてくれる人たちへの感謝の気持と行動がなければなりません。それがエリートたる者に要求されることです。

諸君、大学院修了、ほんとうにおめでとう！

諸君は、世界の科学技術の輝かしい未来の担い手です。どうか、くれぐれも健康に注意して、世界の人びとの夢を実現するよう、元気一杯、がんばって下さい。

これを以て祝辞とします。



— 退官に寄せて —

永年、本学の教育・研究に貢献された教官23名の方ならびに本学の発展のため永く大学行政に従事された事務官、技官等30名の方がここに停年を迎えられ、退官されることになりました。

本学を去るにあたり御挨拶、感想、思い出などを

栗野 満	理学部応用物理学科	教授
梅垣 壽春	理学部情報科学科	教授
菅 浩一	理学部一般教育等物理学	教授
吉村 壽次	理学部附属天然物化学研究施設	教授
小坂 丈子	工学部無機材料工学科	教授
井上 一郎	工学部化学工学科	教授
青柳 茂	工学部化学工学科	教授
室田 忠雄	工学部機械工学科	教授
西本 廉	工学部機械工学科	教授
片山 功蔵	工学部機械工学科	教授
中原 一郎	工学部機械工学科	教授
阿武 芳朗	工学部生産機械工学科	教授
安田 力	工学部電気・電子工学科	教授
榎本 肇	工学部情報工学科	教授
石原 舜介	工学部社会工学科	教授
永井陽之助	工学部一般教育等政治学	教授
関根 太郎	大学院総合理工学研究科電子化学	教授
佐伯 雄造	資源化学研究所	教授
森 栄司	精密工学研究所	教授
織田 暢夫	原子炉工学研究所	教授
高木 徳二	工学部化学工学科	助手
浅場友次郎	工学部電気・電子工学科	助手
高橋 誠	工学部建築学科	助手
岩田 守夫	教務部次長	事務官
西村 正	総合理工学研究科等事務部長	事務官
蓑輪 武	図書館事務部長	事務官
丹羽 保高	施設部設備課長	技官

綴って頂きましたので掲載します。(順不同)

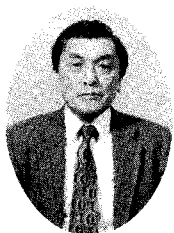
在任中は様々な思い出や御苦勞があり、感慨無量のものがあるとお察しします。どうぞ、今後も益々お元気でご活躍されますようお願い申し上げます。

今年、本学を去られる方は以下のとおりです。

松本佐七郎	施設部建築課課長補佐	技官
平松千鶴子	庶務部庶務課	事務官
山崎 六太	経理部経理課	事務官
渡辺梅次郎	経理部経理課	事務官
萩原 近三	経理部経理課	事務官
染谷 光春	経理部経理課	技官
宮本 茂	施設部設備課	技官
石原貴美子	教務部厚生課	事務官
鎌田 和子	教務部厚生課	事務官
三浦ヤエコ	教務部厚生課	技官
福家 まつ	教務部厚生課	技官
安藤 みよ	教務部厚生課	技官
大久保 正	工学部有機材料工学科	技官
石橋 渡	工学部有機材料工学科	技官
豊岡 冨子	工学部有機材料工学科	技官
市瀬 政幸	工学部化学工学科	技官
中山三代吉	工学部機械工学科	技官
福 弘子	工学部制御工学科	技官
斎藤利器太郎	工学部附属工業高等学校	教諭
小方 脩	工学部附属工業高等学校	教諭
額賀 道徳	工学部附属工業高等学校	教諭
小林信一郎	工学部附属工業高等学校	事務官
山本喜一郎	工学部附属工業高等学校	事務官
塚田美代子	工学部附属工業高等学校	事務官
小林 五郎	精密工学研究所	技官
山澤 潤三	精密工学研究所	技官

何か起らないように

片山 功蔵



大変長い間本学にお世話になりました。1925年(大正14年)生れは、年齢が昭和の年号と同じです。昭和6年小学校入学、12年中学、17年旧制高等学校、そして19年10月に本学に入学したのですが、その節目毎に

満州事変、支那事変、大戦勃発、本学入学直後に東京空襲が始り終戦と続くわけでした。以来熱工学の勉強を今日まで楽しく続けさせて載きました。皆様のおかげと深く感謝する次第です。

私40年ぶりに人生の節目を迎えますが、地震か? 火事か? 雷か? と云わないで、今回は私共世代の節目毎に生じたような不幸な出来事が絶対に起こらないことを心から祈ります。本学の一層の充実発展を期待致します。

(工学部機械工学科 教授)

停年にあたって

井上 一郎



私は昭和22年9月、東京工大化学工学科第6回の卒業生として社会に出ましたが、縁あって、学窓を離れてから24年目に出身学科に招かれ、大岡山で研究・教育生活を送ることになりました。思えばお世話になった13年半という歳月は実に短い期間でした。

就任早々から、長津田の大学院に関連して応化系学科再編成という大きな問題に遭遇し、多くの発想法を大学で学びました。今思い出しても、いろいろなことが昨日のように脳裡をかすめてゆきます。それにしても、素晴らしく恵まれた環境の下で、好きな研究を楽しく行なうことができたのは、私にとりまして誠に幸せなことでした。これは偏に周囲の皆様の暖かいご理解とご支援の賜と深く感謝しております。

科学技術の発展に大きな期待が寄せられている今日、理工系大学に対する社会的要請も日々が強まってくるものと思います。このような要請に応え、次代を担う若いすぐれた人材を養成するために本学の益々の発展を祈念してやみません。

終りに本学の諸先生ならびに関係皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

(工学部化学工学科 教授)

在職10年をふりかえって

菅 浩一



本学に参りましたのが昭和49年12月で、あっという間に10年が過ぎ去って行きました。とくに、後半5年間はまさに光陰矢の如しという感じです。大学を卒業したのが昭和21年、大学院特研究生・助手と大阪大学で過ごした約10年間は別として、約19年間を研究所(東京大学原子核研究所)に勤めた私にとっては、この10年余りの学生を相手にする生活は貴重なものでした。講義のために勉強したり、学生の実験を指導したりしている間に、自分は本当に物理が分っているのかと反省させられる機会が度々ありました。また若い助手、大学院博士課程・修士課程の院生、学部4年

卒研学生を指揮しての研究については、毎週1回各人から研究の進捗について詳細を聞き、夜のふけるのも忘れて議論し考え込んだりして、オリジナルな研究が出来たのを誇りに思っております。

このように稔りの多かった10年は、本学の教育・研究上での良い環境、良い同僚に恵まれたこと、若い人々の努力によって支えられたものと感謝する次第です。よく定年退職を卒業にたとえる方があります。しかし自身をふりかえって見ますと、とても卒業証書をいただけるような立場ではないように思います。教育の面でも研究の面でも、やり残したことが沢山あります。幸いにして第2の奉職先もきまっておりますので、再び若手になった積りで努力しようと考えております。この10年間に感じた学生教育上の問題(特に本学について)、本学の組織上の問題はいくらかありますが、これらは在職の方々の英知によって解決されていくものと存じます。

(理学部一般教育等物理学 教授)

停年を迎えて

織田 暢夫



少年時代何かのはずみで学を志ざし、以来他のことには目もくれずこの道一筋とやらで参りましたが、志のみ高く何やらに欠くるの典型でしょうか、道遠くして日暮も迫り東工大を退官することになりました。人生の他の道の選択なかりしやとしきりに想う比喩です。

本学には、24年前の昭和36年に新設の原子炉研究施設に助教授として参りました。当時の本学は私にとって憧れの自由の学府でありました。ところがあてがわれた研究室はブルサイドの老朽二階木造建屋(現在は立派な鉄筋コンクリート三階建に改築)、研究設備は皆無に近く、廊下を人が歩くと振動で実験不能という悪条件下に二年間耐えましたが、遂に米国加州大学(パークレー)に緊急避難すること二年。帰国した頃には現在の原子炉工学研1号館の半分も完成、やっと細々ながら実験も始められるようになりました。以来20年、夢我夢中で好きなテーマの研究に専心することができましたのは、ひとえに自由の学府東工大のお陰様と感謝致しています。

米国の友人から「I wish you a happy and pleasant retirement life」と停年お祝いの手紙をもらいまし

だが、人生80年の今日、いわゆる定年後ののんびり快適生活など別世界のお話のような感じです。やっと人生の第一ラウンドが完了、これから第2ラウンドのゴングとともに、これまで避けて来た新しい人生行路へ向けて元気一杯走り出すつもりです。どうか倍旧の御支援、御鞭達をお願い致しますと同時に、お世話様になりました皆様の御健勝と御活躍をお祈り致します。

(原子炉工学研究所 教授)

挨拶

青柳 茂



中学生時代に無機イオン反応に興味を持ったのがきっかけで私は化学屋になったのですが、その折クロム化合物が酸化状態に応じて示す多彩な変化に特に引かれ、薬局から試薬を買入れては夢中で試験管を振ったものでした。当時指針としたのが永海佐一郎教授の著書の一つでした。永海教授は本学に電気化学の基礎を据えられた加藤興五郎教授のお弟子さんで、その加藤教授の居室であった部屋で私が電気化学講座担当者としての何年かを過ごすことになったことには因縁めいたものを感じます。

かつて最も精密な化学として物理化学の最先端にあった電気化学が、量子化学の勃興と発展に押され、電気化学工業の没落に足を引っぱられて色褪せて行ったこと、電子材料の開発やエネルギー変換関連の研究の進展に伴って電気化学の概念や技法が再び注目されるようになったこと、こういった歴史の流れを私は、本学にあって見てきました。私自身この流れの中の局面を大きく変えるような寄与をなし得なかったことに忸怩たるものがありますが、多くの優れた学生達の生長過程において何らかの手助けができたかもしれないと思うことにより自ら慰めております。本学を去るに当り、同僚各位のご研究の一層の発展を祈念いたしますが、人の英知と技術力の間のますます大きくなる不均衡を考えると、この種の挨拶にいささかのためらいを覚えざるを得ません。この不均衡の打開のために皆様の智慧が集められることを併せて願ってお別れいたします。さようなら。

(工学部化学工学科 教授)

茫茫三十有余年

梅垣 寿春



昭和の年号と共に齢を重ね還暦を迎えるに至りました。幼少年期を戦雲に明け暮れて55年、戦後の劣悪な生活環境の中で忍耐を要する数学を志し、本学の門をくぐることを得て以来32年の歳月の間、教育・研究一筋に努力を重ね、稔り多き日々を過ごすことができました。茫々たる30数年間、私の固有のエントロピーは $\gg \epsilon$ であったのが $\ll \epsilon$ と著しく減少し、充実感をもって本学を去ります。私にとって幸運であったことは良き師・良き先輩に出会い、良き同僚に恵まれたこととあります。更に最大の収穫は数学・情報科学両学科在任期間に亘って非常に優秀な学生達に接することができ何十人にも及ぶ勝れた弟子を得たことで、これは私の生涯に於ける大いなる成果であり、また本学のような絶好の環境にある大学で活動できたお陰で他の大学の研究者も集い来たり存分に研究活動を行う機会に恵まれ強力な研究集団を結集し得たことです。

目下、本学は理工学の最前線を行く多くの分野を擁しております。そこには多様な境界領域があり、例へば生命情報制御システム科学(工学)を一つに統合した大領域などが正にそうであると思いますが、私は思うに片々たる一分野毎の拡張を論じて概算要求など為さずに、本学の多くの分野から見て略等距離にあり而も時代の要請に最もよく応え得る新学部の要求に全学の英智を結集されることを提言し度いと思ひます。吾々数学応用関連分野から見ても生命システム情報数理は興味あり、且つ教育・研究を推進し甲斐のある応用領域にあるのです。

最後に予てよりの意見であります。本学は教養部が無い一般教育の責任の所在が不明確なのです。私は以前13年間に亘って一般教育も担当しました。当時はその「要」となる教授が居られたが、現在は全学的に見て問題点が多々あるのです。上述の新学部計画と合わせて、これを検討し推進する機関が努力を開始されたと承っておりますが、速かな達成を期待します。5年後の本学の状況を期待と関心をもって見守ります。終りに、本学の益々の発展を心から願うものであります。

(理学部情報科学科 教授)

退官に際して

阿武 芳朗



私は昭和21年に本学の機械工学科を卒業して、生産工場現場を19年体験した所で、本学の生産機械工学科新設があり、母校に再びお世話になり、それから再び20年の歳月を経たこととなります。

今回停年退官を迎え、東工大のお務めを果すことになりましたのは、先輩の先生方を始めとして、優秀な研究室職員の皆様のお蔭げと感謝しております。

思えば、私が学生の頃に比べて、本学の学生数、職員数、教官数において、数倍の規模に成長致しました。また本学の研究レベルが社会的にも高く評価されているのは、教授停年を60才と従来より決められていたことも大きく寄与していると、常日頃考えておりました。今後は、大学の量的な拡大は、殆んど望めない時代であります。

しかし本学の教育、研究面で本学独自の特長を生かし、我々が大学入学に際して、あこがれと希望もっていた蔵前時代の伝統を生かせる大学として、質的に益々発展されることを期待し、皆様方の御研鑽を祈る次第であります。

(工学部生産機械工学科 教授)

停年退官にあたって

栗野 満



終戦の翌年(昭和21年)10月から文部教官3級(同年4月1日官制改正で助手はこう呼ばれることになったが、この呼び名がいつ消えたかは定かでない)ということで物理教室に所属、大石教授の下で温度関係の研究を始めたのはつい昨日のようにも感じられるが、すでに38年余の歳月が流れたことになる。

当時の物理教室の現員は教授1、助教授1、助手2に、専任講師1、附属予備部教授1、附属工業専門部関係物理教授2の集りであり、現在と較べると正に隔世の感が深い。その間学生定員増があるたびに低学年物理学生実験室の整備に追われたことは今となって見ればなつかしい思い出である。その間に

やっと新築された第3新館も取りこわしが話題になっているが“古くゆくものはわが身なり”の感が強い。

その後、応用物理学科の新設、南棟新築、極低温実験装置、極低温エネルギー実験センターの新設を行い、本学に極低温実験の環境整備ができたことは温度物理学講座の責任者として嬉しいことであった。

また、教育委員会委員長として1年生教育を6類に分ける作業を行ったことや百年史編集では最後のしめくりを委員長として行うことは身に過ぎた大役であったが終ってみれば楽しい思い出である。

学生のクラブ活動との関係では新発足の天文部の顧問教官になり、部室の新規割あてを得るのに苦労したが、停年間ぎわにその件も解決したことは喜ばしい。その他色々思い出はつきないが、種々ご協力いただいた方々に厚く感謝の意を表して筆をおく。

(理学部応用物理学科 教授)

退官にあたって

佐伯 雄造



本学の教官の1人に加えていただいて18年になります。顧みますと、学園紛争、あるいは長津田キャンパスの問題で度重なる討論と会議で時間を費やした一時期がありましたが、大変恵まれた環境のもとで静かに研究と教育に携わることができましたことは、この上なく幸いだったと感謝しております。

私は学生、職員時代ともに資源化学研究所で過しました。終戦後の不安定な時代でありましたが、旧制学部の学生の時に旧資源化学研究所の舟木好右衛門先生の研究室で卒業研究をさせていただき、引き続き研究科学生としてお世話になりました。当時の資源化学研究所本館は現在の石川台地区にあり、150坪の小さな木造平屋建でありました。建物の前は雑草の生えた空き地で、のびのびとした雰囲気のもとで勉学と研究をすることができ、多くのことを学びました。その後、41年12月に本学に戻りました時には、旧資源化学研究所と旧燃料科学研究所が発展的に整備統合され、36年に完工した鉄筋コンクリート造りの新資源化学研究所本館(現在の石川台3号館)に研究室をもたせていただきました。そして、52年からは現在の長津田キャンパスの資源化学研究所に

住みつきました。いま、往時をふりかえりますと、長い年月の経過と時代の変遷を感じます。

この間、長年にわたり大変お世話になりました諸先生をはじめ皆様方に心から厚くお礼申し上げますとともに、本学の更なる発展を祈ってやみません。

(資源化学研究所 教授)

去来するもの

関根 太郎



昭和19年10月電気化学入学以来、40年余りを東京工業大学の寛容と自由の零州気の中で過ごさせていただいたことを深く感謝いたしております。

さて、この間のことどもを回想すると、終戦時の混乱、新制大学としての出発、大学院の設置、複数学部への移行、学園紛争、長津田への移転、創立100周年の祝典等々の大きな転期との遭遇が新たな記憶として鮮やかに脳裡に浮んで参ります。特に、それぞれの時と場合に出合ったよき師、苦楽を共にした友人、楽しい時を過した学生諸君の面影が当時のままの姿で甦って参ります。

一方実際に古い研究のノート、会議の記録等を整理しながらふと気付いたことは、これらの記録の一つ一つの断片が水面に浮かぶ泡沫のように、その時々々の光の中で次第に形を変えやがて大きな流れの中に消えてゆく途を辿っていることでありました。このように過去の総てが次第に消滅し、新たなものへと生れ変わる自然の成行きを素晴らしさを想い、今、將に本学を去るに当って大きな心の安らぎをおぼえている今日この頃であります。

ふと窓外の長津田キャンパスの雑木林に目を転ざると、冬木立ちの根元に積もった落葉にも早春を思わせる陽光が降り注いでおります。私の本学での体験が、せめて一握りの腐葉土となることが出来ればと願っております。

最後に、東京工業大学の皆様が萌え出す木々のように益々の御発展を遂げられるよう感謝をこめて心から願って止みません。

(大学院総合理工学研究科 教授)

出会いと別れ

中原 一郎



昭和20年3月9日、翌日の入学試験のために上京して鶯谷に泊った。夜中に空襲警報のサイレンで起されて防空壕に飛び込んだ。空には探照灯が交叉し、高射砲弾が炸裂し、その中でB29がキラキラと輝いて見える。やがて浅草方面の空は赤く染まり猛煙で覆われてきた。こんな日に入学試験なんかないであろうと思ったが、鶯谷から上野……東京……と山手線沿いに焼跡を見ながら歩き、品川から電車に乗って大岡山に着いた時は既に正午を過ぎ入学試験は終わっていたが、午後追試験を行なってくれた。空襲で受験者が減ったために合格できたらしい。しかし入学してから4、5、6月と空襲で焼け出されること3回、殆んど登校できなかった。

終戦と共に臨時閉鎖、10月より新学期が始まり、翌年4月より学科制が廃止され、独自の学習計画によって勉強すればよいことになった。そして卒業研究を津村教授のもとで行うことを希望し、これが材料力学を志す契機となった。幸にも5年間の特別研究生、続いて助手の席が与えられた。戦後不況の社会に一步を踏み出したことにはなりますが、間もなく経済復興の波の中で理工系ブームが到来し、本学はトップレベルの大学に押し上げられ、日本一優秀な学生が集まるようになりました。教師にとっては教え甲斐のある学生を教育することは、この上もない喜びでもあり楽しみでもあります。また昭和34年頃より高度経済成長時代を迎えて大幅な学生増と教官増があり、教官の地位も安定して思う存分仕事をすることができ、停年を迎えるに当って誠に感謝している次第です。

大学を去るに当って日頃気にしていることは(1)“量より質”に生き甲斐を感じて過してきましたが入学定員はこれでよいのでしょうか、(2)(研究)博士だけでなく学術博士も積極的に取入れては、(3)本学名誉教授の選考において、本学助手として、勤務年数を算入する方法は、(4)カリキュラムを自由化しては、(5)1年次を全寮制にしては、(6)新建築物の外観があまりにも貧弱過ぎる…母校が質、量共に発展することを期待しています。

(工学部機械工学科 教授)

停年に当って

室田 忠雄



本学卒業以来37年間、一貫して機械工学科で教育と研究に微力を尽して参りました。学生時代を入ると40年を大岡山で過したことになります。この間立派な恩師・先輩に恵まれて暖かい御指導を頂き、同僚の多くの方から支えられ、また後輩諸君の協力を得ましたことは、私にとりまして誠に幸せでありました。

そして恩師益田森治先生が蒔かれた塑性力学の種を育て根を付かせることができたのを、ひそかに喜びとしております。

37年を振り返って、一番短く感じたのは最後の一年で、あっという間に慌ただしく経ってしまいました。また一番長かった年はと言えば学園紛争の昭和44年で、砺波・稲田・当麻の三先生と一緒に「クロニクル」の号外を某所で秘かに印刷したことや、皆さんといろいろ苦勞を共にしたことを思い起します。当時の教授会のメンバーで今も残っている人は少なくなりました。本学は世代交代が堅実に進んでいる証左でありましょう。

退官まで一月余りを残す今は、肩の荷を下ろしてほっとしている、というのが率直な心境であります。そして本学がいつまでも若さを保ちながら益々発展していくことを祈ってやみません。

長い間お世話になった皆様に心から感謝を申しあげまして筆を擱きます。

(工学部機械工学科 教授)

無 題

安田 力



「図書出納手を命ず、日給五十銭を給与す」昭和十三年六月二十二日、東京帝国大学文学部史料編纂所。これが私の社会人第一歩でした。13才。小卒の資格ではじまりましたので、旧制度募集の終りに近い昭和23年春、晴れの東工大入学したよろこびは筆舌につくせません。変てこな経歴を持ち、入試答案も見当外れなところが多かった私、十何倍かの競争率でもあり、ま

さに夢のようでした。

それからの3年間は、昼は本学電気コースの学生、夜は定時制高校の機械科の教員という生活でしたが、勤務先の校長先生は蔵前の卒業生で、とくに温かい御理解をいただき、それまでは本だけがたよりの独学生だった私にとって、生きた学問に触れるというまことに鮮烈な体験をすることができました。

卒業後は信州大学工学部にまいりましたが、そこには本学の先輩の先生方がおられて、親身なお世話をいただき、また研究の面ではひきつづいて本学の恩師の先生方から温かい御指導を受けることができました。旧制学位の方も〆切りまぎわのゴールインとなりました。

昭和38年春に思いがけなく母校に呼び戻していただきましたが、それから今日までの22年間は良き師、よき先輩・同僚にめぐまれ、また素質にすぐれた多くの学生諸君のたくましい探求心に支えられて、楽しく送っているうちにアレヨの間に過ぎ去ってしまいました。しかし振り返って見ると、この間にいろいろな方々から御好意や御協力をいただきましたことが数多くございます。今そのひとつひとつを想い感謝の念でいっぱいです。本当にありがたうございました。私にとって本学は「東工大サマサマ」なのです。
(工学部電気・電子工学科 教授)

技術と政治

永井 陽之助



昨年9月、還暦を迎え、本年3月で本学を停年退官する私は文字通り昭和史とともに生きてきたわけです。60年の人生をふりかえると、そのおよそ三分の一の重要な期間を本学でやりたい放題、自由にすごさせていただいたことは、私にとってこのうえない幸せでした。

特に北大から本学に移って間もなく直面した学園紛争は、私の人生にとっても、専攻の政治学研究にとってもえがたい経験となりました。日ごろ話しあう機会がなかった理工系専門の先生方と、理工系大学における人文社会のあり方について、夜を徹して語りあった日々が、今なお鮮明なイメージで、よみがえってきます。

去る2月9日の最終講義でも触れたことですが、

その頃よく聞かれたことは、「月に人を送ることができるほど科学・技術の発達した今日、政治や社会の問題では、どうして進歩がないのか」ということでした。こういうとき、私は「月に人を送ることができたのは、要するに月と地球の間には人間が住んでいないからだ」と答えることにしていました。

人間という神にも悪魔にもなれる「怪物」の住むところ、駅前広場の区画整理ひとつでも、たいへんな努力が要ります。物的自然のように「パズル」におきかえて、すべての社会問題が「最終的解決」可能と信じはじめたところに、二十世紀の栄光と悲惨がうまれたとっていいでしょう。本学の人文・社会群には、数多くのユニークな人材を擁し、この人間という怪物を解き明かしてくれます。幸いなるかな、本学の学生諸君！

(工学部一般教育等政治学 教授)

停年退官にあたって

森 栄司



昭和25年4月に電気科学研究所助手として奉職以来35年(内25年間は長津田、残りの10年間は長津田)、一貫して研究所に属し、研究に没頭してきましたことは幸せの一言につきます。しかも良き師(実吉純一先生)、同僚及び多くの優秀な学生さんに恵まれ、強力超音波工学と新工学の分野を創設することが出来ましたことは欣快の至りであります。

一方昭和56年から3年間、研究所長・評議員として研究所、大学の運営に携わり、多方面から本学の在り方を観察、分析、思考する機会を得ました。その結果、本学は世界でも有数の研究活動の盛んな大学であることに異存はありませんが、将来産業界のリーダとなる人材を育てる教育の場としては残念ながら不十分であることを実感いたしました。

理工系特有の専門に偏りすぎた教育を是正し、視野が広く、良い判断と統師のできる人材を育てることに重点を置き、近い将来名実ともに第一級の大学としての地歩を築かれんことを願って止まない次第であります。

長い間、本当に有難うございました。本学の皆様の今後の御活躍と御健勝とを心からお祈り申し上げます。
(精密工学研究所 教授)

退官に当っての雑感

石原 舜介

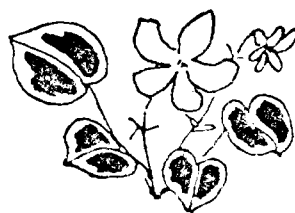


終戦の混乱の最中の昭和21年、東工大に入学し、卒業後1年半程の都庁勤務はあったが、今日まで約40年間大学に御世話になった。その間諸先生を始め、先輩各位、また同僚や後輩諸氏に助けられ、今日まで健康で無事に過すことが出来た事は心から幸と深く感謝している。顧みると恩師田辺平学教授の逝去、社会工学の創設、学園紛争、長津田建設等、数多くの出来事がつい昨日の様に想い出される。

本学は単科大学から発展してきた利点があり、常に大学が一体的に運営され、他大学では考えられない様な長津田や社会工学科等の創設を行い、学問分野のみならず、社会に新風を送り込んできた。これも時代の要請に対して、大学が柔軟に対応できる体質(全学的意志統一が図り易い)を持っているためではないかと思う。戦後40年のわが国の発展は、世界史上類い稀な速度での成長で、その基盤となったものが技術の革命的進歩である。これからの技術分野は、より早い速度で革新され、大学と社会とのかかり合いもより深くなっていくであろう。そのため学問の再偏や新しい分野への発展など、大学を取り巻く環境も急速に変化してくるであろう。東工大は、これ等の変化に順応しながら、常に最先端を歩み続けるだけの学内の柔軟性と、研究の高水準を持続すると確信し、今後の一層の発展を期待している。

しかし、僅か2年間評議員として、学内の意志決定に若干参加した経験から、学内の運営がややギクシャクしている様に思われた。これは一部社会の発展や技術の進歩に研究がやや遅れてきているという焦りかも知れない。今こそ学内をまとめ明確な目標を掲げて邁進する時期であると思う。

(工学部社会工学科 教授)



退官にあたり思いつくまま

西本 廉



私が入学した昭和21年は本学が独自の教育体制を発足させた年であり、それは人間形成に重点をおき、狭い専門的視野だけでなくより広い視野にたって技術を考え、創造できる技術者を育成することにあつたように思います。第二次世界大戦直後の貧困と欠乏のどん底の時代でありながら、大学は新生の活気に満ち、精神的に満足させてくれるなにかがあったように思います。工業立国を標榜して再建に勤めたわが国の工業はこの40年間に飛躍的發展を遂げ、それにつれて本学もまた質・量ともに大きく發展しました。しかし、最近の科学・技術の急速な發展はそれ自身の世界観に変革をせまっているように思います。本学の伝統は現状の正確な把握と分析に基づく長期展望と教育理念の形成およびその体制づくりが全学のコンセンサスによってできることにあります。本学がその伝統をいかして今後益々發展されることを切にお祈りします。

終りに目出度く停年退官できますことは今日まで公私にわたり御指導、御鞭達を戴いた学長をはじめ、諸先生ならびに事務官、技官の方々の御厚情によるもので、この機会をかりて心から御礼を申し上げますとともに皆様には益々御壮健の程お祈り申し上げます。

(工学部機械工学科 教授)

退官にあたって

榎本 肇



昭和19年9月、本学航空機工学科に入学し、終戦後コース制となり、電気工学コースに所属し、昭和23年3月卒業し、2か月間森田清先生の研究室でお世話になった後、通信省電波局に入局、その後組織が総理府郵政省となり、局名も電波監理局と変りました。この間、電波関係の仕事を行い、ついで国際電信電話株式会社に入社し研究所で計算機に関連した研究開発を担当し、昭和42年に新設の電子物理工学科情報工学講座担当として大学に帰りました。

昭和49年に情報工学科が創設され、以後同学科に所属し、今日に到りました。退官後は、富士通国際情報社会科学研究所のお世話をする予定です。

小生は、大学卒業後何度か仕事を移り、無線、デバイス、システムなどの研究開発などを通じて最近情報の何たるかを体系的に分り始めたところです。

大学では、全く自由に教育、研究をやらせていただき、大変楽しい思いをしました。これは他の組織にない非常にすぐれた点であると感じ、これまでの御厚誼に深く感謝する次第です。今後大学の社会とのインタフェースを考えると、組織としての柔軟性が要求され、おそらくそれが最大の問題点となるのではないかと思います。

今後一層の發展を期待しております。

(工学部情報工学科 教授)

退官に際して

吉村 寿次



昭和20年学部入学以来、人生の大半を本学で過ごさせて頂きました。理学部化学科から天然物化学研究施設に移り、この7年間は長津田の生命化学専攻でお世話になりましたが、自由に仕事をさせて頂いた幸福な日々でした。これも、社会の恩恵、恩師故星野・佐藤両先生ならびに先輩のご指導と同僚後輩のご援助、事務の方々のご協力、研究室を巢立って行ったすぐれた共同研究者のお蔭であると、衷心よりお礼申し上げます。

振り返ってみると自分の浅学非才が悔まれますが、世代の交替によってのみ存続できる人類(生物)の共有財産である知識の継承と發展の場で働かせてもらったことは、ほんとうに良かったと思います。若い人達には延びんとする生命力と適応力があります。従って、知的興味を正しい方向に燃えあがらせることが出来れば教育の大半は成就できたと考えるようになりました。先生から引継いだ当時は泥沼だと云われた糖類の研究も、分析器機の進歩に伴ない急速に發展しており、その生理的意義の解明とともに研究者の数も企業の関心も増加の一路をたどっています。内外の研究会の發展に多少でも貢献できたことで満足しております。

他方、我国の科学産業は、追つき追越せの時代か

ら指導性の発揮を期待される段階になっております。

そのためには、新しいことに挑戦するエネルギーと独創性が不可欠であり、質的な変換が必要であります。東工大には活発な研究活動と自由の伝統がありますが、単一民族の“みんなで渡ればこわくない”という気風や強すぎる管理体制はそれを阻害します。

本学の叡智がこれからもその方向性と発展に活路を切り開いてゆくことを願ってやみません。

これからの東工大を支えて行かれる皆様のご健康を心から祈念いたします。

(理学部附属天然物化学研究施設 教授)

窯業原料から火山までの38年

小坂 丈予



私が卒研で御世話になった本学地質鉱物学講座に卒業後そのまま居ついてしまったのが昭和22年の事であって、当時は同研究室は窯業学科に属していた、昔から窯業では地球を削って、そのまま原料として用いる工業だと言われて来たが、いくら何でも硬い岩石をそのまま削って用いるのでは効率が悪い。そこで実際には岩石が煮たり、焼いたりされてやわらかくなった部分、即ち火山・温泉作用によって、粘土化したものを用いているのである。私も最初は原料粘土の研究に携わっていたが、そのうちその成因となる現象をより詳しく知る必要があると感じ、昭和25年に東大の地震研に武者修業に出してもらった、ところが地震研に移ったその年に、伊豆大島が180年ぶりの大噴火をおこし、またその翌々年には明神礁の海底火山活動で測量船が乗員もろともに遭難した事件があり、それらの調査にすべて参加したため、たちまち火山研究のとりこになってしまった。このため最初はほんの2～3年のつもりが、やっと東工大に復帰したのは12年もたった昭和36年であった。それでもこの間、火山の観測に化学的手段を導入する事や、初・念の岩石の変質の研究にも自分なりに努力して来たと思っている。

さて職を得て東工大にもどったからには、火山からは足を洗って、鉱山原料一筋にと決心してきたつもりであったが、その後も三宅島(前回)、秋田駒ヶ岳、西之島、有珠、御岳と噴火があいつぎ、席のあたたまる暇もない様になってしまった。その間本来の鉱産原料の研究も続けて来たと考えているが、そとで

の仕事は何かと日につき易く、世間からはすっかり“火山屋”にされてしまった。しかしそのような私を我が東工大では暖かく包容して、今日まで仕事を続けさせて下さったこの御恩は、生涯忘れる事が出来ないものである。その上このたび長年の主張が認められ、全学共同利用施設としての草津白根火山観測所の設置が決まり、本年4月から開設の運びとなり、小生としてはとんだ置土産(或いは忘れ形見)になってしまった。しかし今後とも東工大の学問に対する自由で寛容な御配慮をもって、この生れたての赤ん坊をなんとかおそだて下さいますようお願いして、ご挨拶にかえたいと存じます。

(工学部無機材料工学科 教授)

工業高校の盛衰を見て

斉藤 利器太郎



昭和30年、川崎の御幸中学校(大規模校で生徒数1500以上)に勤めていた頃は、トップクラスの生徒でないと県立の工業高校には入れなかった。普通科の県立川崎高校と工業科の県立川崎工業高校は同じ位の難易度であった。また、その中学で、500人中1番で卒業した生徒が附属高校に合格し、3番は不合格になった年もあった。その頃、工業都市川崎は人口40万から100万都市を目指していた。市内の大企業は、地元は勿論、地方からたくさんの中卒者を受け入れていて、殆どが養成工制度を採っていた。彼等の中で向学心に燃えている者は、夜学の高校へ通って来ていた。県立工業高校の定時制では、入学志願者が定員の4倍以上にも達し、3年目にやっと入れた生徒がいた程である。私が附属工高へ移ってきたのは36年であるが、その頃は、附属からも毎年東工大へ10名前後が合格していた。だが、40年辺で工業高校のブームも天井を打ったようである。以後、年を追う毎に工業高校の偏差値は下落し、定時制でも生徒が減少の一途をたどり、私立の工業高校は、普通科へ改編する処も多く見られるようになった。普・商・工・農などといわれるようになって来た。最早、工業高校が昔日の面影を取戻すことは無いようにも見える。時代の変化をつくづくと感じ乍ら、退職の時期を迎えて感慨もまた一入である。

(工学部附属工業高等学校 教諭)

大岡山の四十八年 二話

浅場 友次郎



その頃、浜松高等工業学校電機研究所は、1940年の東京オリンピックを目ざし、テレビ中継車整備などで活気に溢れていた。昭和12年4月、歳15、車窓の野は菜の花盛り、森田清先生に伴われて、極超短波真空管の試作技術修得のため浜松に向った。私の東工大との係り合いの始まりである。

昭和17年八木秀次学長時代、多摩陸軍技術研究所大岡山分室、占賀研・森田研は、レーダーの研究開発に忙殺されていた。西巻先生設計の波長5、3 輝マグネロン試作には一人万端で減私奉公の毎日であった。やがて昭和19年電子工学研究所の発足で雇の辞令を山本勇先生より受け正式職員となる。

最近、幸せなことに山本勇先生の遺留品から当初より行方不明の集水会（電気系同窓会）設立主意書を発見した。明治43年12月18日（日曜）芝の紅葉館での発会式の様子を記録した毛筆書き日誌もある。

（来年は77周年）設立の直接動機は、主任技術者資格の格付アップ運動で、大変ハードの盛り上りなのである。丁度この時期に卒業した小説谷崎「痴人の愛」の主人公河合譲治と、ナオミのロマンは、この背景を思うとき、尚そぐわぬ気持ちのままである。

当初より48年間に亘る勤務をさせて載だけたこと、過去、現在の多くの諸先生、同僚の方々の厚い御疵護のたまものと深い感謝で胸が一杯です。

今、職場に私なりの貢献ができたであろうかの悔いを残し、大岡山に帽を振って立去ります。

（工学部電気・電子工学科 助手）

「核兵器の廃絶」のために

高橋 誠



45'8・6広島に原子爆弾が投下され、死傷者多数、この一報を私は勤務地である満州国で聞いた。

46'10月私は引揚船で帰国、貨物列車で焼土の広島を通過、11月東京工業大学に勤務した。

54'3月ビキニ水域で水爆実験があり、この灰を受け、9月第1福竜丸乗員「久保山愛吉」氏が死んだ。この事件は、日本中に衝撃を与え、東工大を始め多くの大学の教職員がガイガーカウンターを手にして「核兵器廃絶」の運動に奔走した。この中で、「原水爆禁止全国協議会」が生まれ、今日では例年、原爆投下日である8・6、8・9には広島、長崎で世界大会が開かれるようになっている。

しかし戦後40年を迎えて、核の保有数は5万発以上、その爆発力は広島型の百万倍以上になっていると言われている。また若しその1%が、核戦争に使われれば、昨年世界的に波紋をよんだNHKの「核戦争後の地球」で明らかになったように、人類の死活に係わるような事態が予想されている。

「核廃絶」の課題を解決することは、何かあるとムキになって走り廻るが、熱気が覚めるとヘタリ込むような感性的な運動だけではいけない、と今私は反省している。

自然科学の成果が日々蓄積されてはいるが、それを制御する人文科学の知識の蓄積が、私にとって非常に少いことを、いま心から反省している。

いま幸い天恵の多くの時間を手にしようとしている時、「核廃絶」の運動を理性的なものに転換出来るような、私の学習時間としたい。

（工学部建築学科 助手）

「私の歩んで来た道」

平松 千鶴子



私には青春時代が二度あった様な気がします。大連の女学校を出て花嫁修業に明け暮れていた所、日増しに大東亜戦争が激しくなりいつ徴用令が来てどこの戦地につれていかれるかわからないと言はれ心配していた所幸市役所に勤務そして3年で終戦。父が技術屋なので残留を命ぜられ帰国できず山東に渡ったところ国民党と八路軍の戦争に巻きこまれ艦砲射撃や低空飛行で射撃されたり命からがら大連につれもどされ、そこから朝鮮の国境の鴨緑江まで行き撫順・奉天とやっと昭和27年になつかしい日本に帰国をゆるされました。今は亡き森川先生のお世話で昭和30年にあこがれの東京・思いもよらぬ立派な東工大に就職が出来ました。若い人達に交じって毎日先生方の

論文のタイプ打ちでした。その中に紛争・そして長津田地区と、めまぐるしい時代でした。最近は一プロのおかげで楽をさせて載きました。東工大に入ってから3年目に落ち着くまもなく母を亡くし、そして父と1人ぼっちになり寂しい思いをしましたが皆様方の御尽力と温い友情に包まれ、そして恵まれた環境の中でお仕事が出来、本当に幸せでした。

早いものでもう30年、私にとって東京はふるさとの様です。なつかしい東工大ともお別れかと思うと感無量です。元気で無事に今日、定年を迎えられましたのも皆様方のお蔭と心から感謝致しております。

本当に有難うございました。

最後に皆様方の御健康と東工大の御発展を祈りつつお別れの言葉と致します。

(庶務部庶務課 事務官)

雑 感

山本 喜一郎



最近友人から登山靴をもらった。これがきっかけで、多摩の尾根歩きから、丹沢山塊の一部に足を向けるようになった。時に沢も登る。こんな時は手杓で清流を汲む。厳しくはあるが子供のような興奮と満足感に

充される。次の機会を待ちあぐむ。

もっとも、私には往年の溪流釣りがある。丹沢の奥深く原流を持つ中津川は、石小屋あたりから下って馬渡橋あたりが主だが、どうしてこうも夢中になるのか時折考えてみることもある。やはり水があるから流れがあるからのようだ。

ふり返ってみると、附属工高専攻科の事務を担当し始めてから20年を越したが、この溪流釣りの年数もほぼ同じで、中津川の流れにこよなく惚れこんでいたと同様、専攻科の仕事に、ぞっこん惚れこんでいたことに気付く。そうでなければ、同じ仕事をこんなにも長く、あきずに打ち込める筈がない。

私にとっては天職であった。この間、これと言った功績を残さなかったが、とり立てて問題もおこさず、すんなりとこられた事は、まあまあひとみに恵まれた健康、これこそ私の宝であったという気がする。休日の溪流釣り、私の健康を支えてくれたのは、これだ。時に、岩を噛む荒瀬に技を競い、とろばにあっては、小魚と語るが如く糸を垂れ、淵の大

物には更に大成を期待する。

これからは、毎日が休日となりそうだが、好日をえらんで川に足を向けよう。いや、山にも……もらった靴が待ちあぐんでいる。以上回顧雑感。

在任中のご支援、ご指導を感謝いたします。

(工学部附属工業高等学校 事務官)

我が人生を振り返りて

萩原 近三



私は後をふりむく事をためらい、こばみ続けて来ました。それと云うのも昭和15年より21年迄の約6年間の軍隊生活で、北支、中北、南方方面へと転戦して来ましたが、思い出す事は、唯戦争の暗い悲惨な場面ばかりでした。思い出したくない、過去を忘れようと、忘却の彼方に捨て去り、毎日を送って居ました。ところが、昭和44年4月、東工大守衛として勤務する事になりました。私の考えも一変しました。目からウロコが落ちるとは此の事でしょうか。光陰矢の如しと云いますが、またたく間に、16年の歳月が流れて、無事ここに定年を迎えるにあたり、今振り返って見れば、走馬燈の如くに浮かんで来る一つ一つが、昨日の事の様に、皆楽しい思い出となって、脳裏に蘇って来ます。思えば学園紛争や、其の他、諸々の事件にも遇いました。これ迄に幾多の人とも出会い、又別れて来ましたが中でも心に残るのは学生と職員の合同サークル(宝生流謡現在消滅)に参加した事も懐しい思い出のひとつです。其の学生さんも今はりっぱな社会人として各々の立場で活躍して居られる事でしょう。週一回の練習も本館地下女子更衣室や講義室を借りて行なわれましたが、一般の日勤の人と違い、変則勤務のために思う様に出席が出来ませんでしたけれども此の様な充実した有意義な日々を過す事の出来得ましたのもひとえに上司並びに先輩其の他の方々の温かい御指導の賜物と心より感謝致して居ります。これからも一層多くの人々より学びつつ思い出を大切にしていきたいと思っております。何卒御指導、御鞭撻の程をお願い致します。最後に、東工大の益々の御発展と皆様様の御健康を心よりお祈り申し上げます。

(経理部経理課 守衛)

退官にあたって

丹羽 保高



昭和56年4月、本大学に赴任致しまして以来、満4年間、施設部設備課長として、微力な私が職を全うできました事は皆様方の御声援の賜と深く感謝致しております。

以前昭和30年頃より、文都省施設部に在職中に旧資源化学研究所、昭和35年頃には原子科学研究所、それと前後して、第3新館の建設の一翼を担った私には、どうしても新任とは思えない懐かしい本大学でした。

赴任と時を同じくして、本大学多年の念願でありました大岡山-長津田間の情報伝達システム工事の実施という、又とない幸運に恵まれ全学一丸となって事に当り、無事完成することができました。

昭和20年11月文部省に就職して以来39年余を殆んど学校建設の電気工事の設計施工に従事、戦後の荒廃より立ち直り、一応の水準まで達した大学建築の姿を見乍ら、あとに続く人たちにバトンをタッチできる私は幸運であると思っております。

東京工業大学の益々の発展をお祈り申し上げて、お別れの言葉と致します。

(施設部設備課長)

学寮と共に

安藤 みよ



昭和43年2月、知人から「東工大の学寮のお掃除なんだけれど勤めてみませんか」とすすめられ丁度子育ても終り子供も成人し、何んとなく平凡な毎日を過ごしていたので、早速、書類を提出し、面接で1週間後に厚生課厚生掛採用となりました。如月寮に来てみてびっくり、余りの汚さに一瞬勤めるのではなかったと思いましたが、学生さんが気の毒になり毎日毎日掃除掃除の連続でした。仲々思う様にきれいになりませんが、1か月程して課長から「安藤さん、学生が小母さんが良くやってくれますので寮がきれいになったと喜んで居ましたよ。」のこの一言で勤めてよかったと、つくづく思いました。

如月寮に来て3か月目、近くの向岳寮の火事で学生さんの荷物が如月寮の庭に山積みとなり、又々以前の汚い寮にもどってしまいました。それも一段落し、そしてあの学園紛争となって行きました。寮の前庭は鉄堀が張られ学外とされ、本学生及び他大学の学生は裏からの出入りの激しさです。呑川の方向は機動隊が待機、毎日学生と睨み合いを続け、又講堂の廻りの乱闘はほんとうに恐い日々でした。学生の居ない時を見計っては鉄パイプを厚生課まで運び出したこともありました。教職員の方々も大変御苦労の多かった日々だとつくづく思います。

私の寮の掃除も今はなくなりましたが、如月寮、高津寮(川崎)、つばめ寮、そして現在の松風学舎と続いて居ります。

十八年の歳月が流れましたが、多くの方々との出会い、嬉しい時、辛い時、思い出はつきません。何事もなく務まりましたのも皆様のお陰と心より感謝致して居ります。皆様の健康をお祈り致します。永い間、本当にお世話様になりましたことを、心からお礼申し上げます。

(教務部厚生課 用務員)

40年間の今昔

小林 五郎



私が本学に就職したのが昭和20年12月でした。当時はまだ終戦後の社会混乱の時でしたので当研究室も人員不足で先生、技官(私)それに学生が一人いるかないかのこじんまりとしたもので、実験に当っては電力がピークに達すると停電もしばしばで瓦斯に至っては時間給ですので停電しないことを祈りつつ、その間に手早く実験するなど冬期の停瓦斯時には暖をとるためにオーバーを着込んで仕事する始末が3~4年はつづいてたと記憶しています。その後エネルギー事情も次第に安定化するにしたがい実験もピッチが上って来ました。今振り返ると大岡山の駅を出ると時計塔の本館がデンと正面にそびえ、そのわきのイチョウ並木(当時は今ほどの大木でなく通路の上は空が見えていた)の道を昭和50年夏まで往復したものです。戦後の労働争議、安保闘争、学園紛争、オイルショックなど時代と共に色々な出来ごとを体験して来ました。さて長津田キャンパスへ昭和50年

の秋に初めての引越が始り精密工学研究所が第一陣となり本学空前の移転が行なわれ、その後、早10年目を迎えますが、当時は「今更なんでこんなところへ」と思ったものですが、以後は年ごとの増築と環境整備も進み現在では、ほぼ完成の域に達しました。たまたま大岡山キャンパスに出向くことができますが、広々として空気のおいしい長津田キャンパスと比較すると何か押し詰った感じさえおぼえますのも私一人ではないと思います。何はともあれ新しい良い設備や環境の中で、安泰な職場生活を40年も続けてこられたことは長年お世話になった関係者一同の御支援、御厚情のたまものと感謝いたす次第であります。終りに東工大の今後ますますの発展を期待する一人です。有難うございました。

(精密工学研究所 技官)

停年を迎えるにあたり

豊岡 冨子



昭和27年より今日まで無事停年を迎えるに当り過去を振り返り見ます時、私の人生の約半生をこちらで過しました事になります。私が入りました当時は紡織学科と申しまして、その工場が現在の中棟の位置に平屋の建物がありました。その中に綿紡、織機、毛紡の順に機械がぎっしり並んで在り、その綿紡室に入り、当時は白樫先生が担当になって居られ、その頃先生の学位論文の実験測定に工場でお仕事で沢山有り、一番忙しい時に丁度二人辞められ私にすぐ入って下さいと申され職員に入りました次第です。その後学生数が増え、繊維工学科と改名致し、先生は繊維物理に行かれ、私は東棟に移転し、その頃より業界では一層技術革新時代に入り新開発装置、新素材、不織布複合材料、其の他研究分野が益々広くなり46年に再び有機材料と改名致し大学側でも就職に先立ち卒論などで新しい研究分野に取り組まなければならない事が多く大分頭を悩ました時がありました。おかげで私共技官にも大分厳しくなり次々とテーマを与えられ、私はトウの開織捌き装置を独自の創案で開発致し、この研究に3~4年費し完成致しましたので特許を出願致し、アメリカ、西独と其の特許を取得致しました。東棟時代は日ま苦しく多忙に明け暮れ54年に有機材料棟に移転を同時に私は技研に

配置換になり尚、東棟でやりかけました関連装置の続き二つ、ターボドラフター、スライバーメーキング装置を57年に開発致し、これで最初に計画致しました「トウ紡績における工程の短縮化」を一応達成する事が出来ました。其の他、33年間には、それぞれの場で、様々な事がありましたが決して平な道程許ではなく、むしろ私には多難な事が多かったように存じますが大過なく務を無事果せ終る事が出来したのは心ある方々の御支援のお陰と、ここに改めて厚く御礼申し上げます。長い間お世話になりました。最後に皆様の御健康と、御精進をお祈り致しまして私の御挨拶に代えさせていただきます。

(工学部有機材料工学科 技官)

停年退職を迎えて

松本 佐七郎



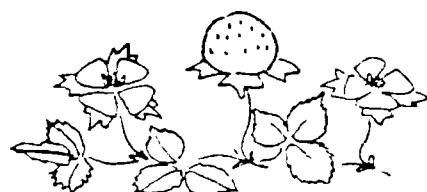
工業学校、高等学校と7年間の夜間の生活を了えて、青雲の志で株式会社水府組に就職したのは、昭和22年24才の時でした。会社の倒産、再就職、そして倒産、二度の浪人は苦しく暗いものでした。

寄らば大樹の陰だと思い、東工大施設課に就職させていただき、以来35年間公務員の顔だなあとつくづく鏡を見るこの頃です。

会社を昨年停年退職した友人が『6か月の窓際族はとってもつらかった。』と、話していました。利益を追求しなければならぬはずの会社で、何故に窓際族？と不思議な思いでしたが、停年退職の時を迎えて改めて知ると、感じることも多く、3月末日まで、現役でいられる幸せ至上のものと思います。

上司の方々のお骨折りをいただき、再就職も決まりました。御厚意にお応えすべく一生懸命働きたいと思っております。永い間の御厚情に心より御礼を申し上げます。

(施設部建築課課長補佐)



停年に際して

小林 信一郎



昭和19年3月東工大臨時工業技術院養成所を卒業し、4月に本学に奉職してから41年、歳月は夢の如く去り、あと1か月余りで停年を迎えることになりました。思えば大岡山で35.5年、田町で5.5年過ごし、長かったような又短かったような気がします。

当時大岡山の正門を入ると、今の講堂のある方角に真白で形の良い富士山が見え、目を楽しませてくれました。又現在正門を入り、植込みの後にひっそり残っている風洞の残骸は、当時威容を誇った風洞実験室であり、室内を一度見学させて貰いましたが、空襲で焼け現在に至っています。戦争傷跡の唯一の残り物です。

昭和19年4月機械工学科の蒸気実験室に入り、実験の補助等をしましたが、当時雨が降ると室内至る所で雨漏りし、非常に困ったことを思い出します。

昭和24年会計課に配置換えとなり、以後附属図書館、工業教員養成所、理学部学務掛、総合情報処理センター、附属工高と変わりました。どの職場でも上司、同僚、掛の皆様、教官の方のご協力の下に仕事に専念出来ましたことを幸いと思い、お世話になったことに厚く感謝いたします。

最後に東京工業大学、及び附属工高の今後の発展と皆様方の御健勝を祈って筆を措きます。

(工学部附属工業高等学校 事務官)

思い出すまに

山崎 六太



この度無事停年を迎えることができました事は皆様方の御指導の賜物であると思います。本当に有難う御座居ました。私は戦時中は営場製作所で飛行機の製作に、戦後は米軍で自動車の修理をしておりました。

今は亡き大野さんの紹介で34年1月1日に本学施設課守衛に採用されました当時、学内は建物が今よりすくなく春は桜や色々な花が咲き夏は緑が多く秋にはかえでやもみじの雑木がきれいに紅葉し東京に

こんなきれいな所があったのかと思いました。

夜に朝に学内を巡回し良い空気を胸いっぱいにするこれが私の健康のもととなりました。

最後に東工大の発展と皆様方の御健康を心からお祈り致します。

(経理部経理課用度係 守衛)

猪武者のひとりごと

西村 正



ひたすらに走り、歩き続けた黒髪の猪武者も、今や白髪が目だつ猪尾助となって、まがりなりにも職責を果し、本学で定年を迎えることができましたことに対し、私をささえて下さった多くの人々に感謝の念で一杯です。学園紛争も下火になった昭和45年課長職の旅に出てから昭和58年4月に東工大にふたたび迎えられる感慨にふけりながらも当時一緒におつきあいを賜った先生方の姿の少いのには13年間の重みをひしひしと感じました。通算9年余りの東工大の在職でしたがいろいろありました。第一はやはり学園紛争でした。毎日の会議、会場さがし、夜食、自宅から先生方への会議召集、連絡等の電話、電話料がかかりましたね。課長補佐だったということだけで一文の援助もなかったです、もっと応用動作ができないかなあと嘆いたものです。しかし評議会をはじめ12人委員会の先生方とお話することができ活力に満ちていましたね。そうそう100年記念式典も忘れられません。当時三重大学の課長でしたが、多くの先輩から式典出席の問い合わせがありましたね、しかし当時課長補佐だったということだけで呼びがなく、苦勞を共にした2、3の同輩と東工大の事務的な冷さを嘆いたものでした。もっとデリカシーな企画と思いやりがほしいですね。閑話休題。ところで今や教育研究の進歩のいちじるしい時、私は多くの情報を集め、知り覚え活かす、そして教育研究を側面から応援する行政事務を心がけてきました。どうか事務の皆さんも先生方と堂々の論陣をはり、しかも時代におくれないよう企画力、応用力と更には判断力をつけ、しかも暖かく包容力のある事務官になってほしいなと思います。東工大のますますの発展を祈念して。皆さんお元気で。

(総合理工学研究科等事務部長)

定年退職にあたって

岩田 守夫



定年退職の時を迎えて、今あらためて自らのしてきたことをふり返って見ると、昭和23年に文部省秘書課の仕事からスタートし、社会教育課、文化財研究所庶務課、国立大学などの職場を巡って歩くうち、気がついたらいつの間にか、最終ゴールまでたどりついてしまったという気がします。

人生六十の齢に達すると、未来の可能性が薄くなり、過去のことに関心が向くようになります。人それぞれにその人にふさわしい生き方がありますが、私はこれまで一体何をしてきたのか、思う通りのことが何もできなかったのではないのかという反省と悔いが残ったということがいつわらない心境であります。

こうした時に、若い頃読んだツルゲーネフの小説のなかの言葉が思い浮びます。「若い私は未来というものを際限もない、永いものに思って、何のこんなことはこれから先にもまだいくらでもあると思っていた。しかし、ついに来なかった。」という言葉ですが、私はこれからの再出発にあたって、この小説の主人公のおかした轍を踏まぬように、一日一日を大事にして、悔いのない充実した生活がすごせるよう努めていきたいと思えます。

最後の職場となった東京工業大学では、たいへん恵まれた環境のなかで気持ちよく仕事をさせていただきましたことを深く感謝いたしております。教職員の皆さんのご健勝とご活躍をお祈りいたします。

(教務部次長)

停年退職にあたりまして

石原 貴美子



冬のきびしい寒さも終り、桜のつぼみがふくらんでくる今年の春、私にとって東工大のキャンパスとも、いよいよお別れの時期になり数十年間の職務を終えることになりました。

長い様で短い日々を思い、ふり返りますと、昭和20年12月、終戦後の混乱時期に、知人の紹介で、建築の加藤六美先生の研究室に就職さ

せていただいて以来、途中事務に変わり、昭和37年7月には、私事一身上の都合で退職をいたしました。昭和42年には又、今は亡き秋元厚生課長(当時)さまの、御配慮をいただき、再就職させていただきましたことは、今でも忘れることはできません。本当に感謝をいたしております。

考えてみますと、人生の後半殆んど、大学で過ごさせていただき、生活をしてきたようなものです。又大学での奨学金掛(日本育英会、他育英奨学財団約60件)を主にさせていただき、生きがいのある仕事でした。今でも学生さん達に「4月になったら又お願いいたします」などと、キャンパス内で、声をかけられると、つい「ハイ、ハイ」と返事をしてしまいますが、アッ、そうそう私は3月で退職だと思えますと、本当に淋しいような気がしてしまいます。又現在の諸先生方のなかで、学生さん時代に奨学金を受けられていた方で、時々「こんにちは……」等と声をかけて下さると、恐縮に思います。

私も大学での勤務は随分長く、古い人間だと思いつらくここに一筆を終らせていただきます。長い間上司、先輩、同僚の方々にはお世話になりました。今後の東工大の御発展と、皆々様の御健康を心からお祈りいたし、御挨拶といたし度いと思えます。

長い間、本当にありがとうございました。

(教務部厚生課 事務官)

退職に当り平和に貢献 する研究を願う

大久保 正



昭和23年未だ戦災の跡が生々しく残っていた大岡山に勤めてから37年間、諸先生、同僚、其の他多くの人達に助けられて定年を迎える事が出来ましたのは、健康であったのと皆様のお蔭であったと感謝しています。

思い出す事も多くありますが、私にとっては幾回もの死線を越えて生きて来た、残酷な戦争のことで。最近とくに此の貴重な体験を忘れ昔の路線に戻るような嫌な感じが強くすることです。せめて大学内だけでも研究は平和への貢献を基本として行く様に強く希望します。

最後に皆様の御健康と本学の益々発展をお祈り致します。さよなら。

(工学部有機材料工学科 技官)

退職にあたって

袁 翰 武



私の公務員生活は、昭和32年東京水産大学図書館に司書として採用されましたのが始まりで、その後九州大学、東京大学、鹿児島大学、また九州大学、そして最後東京工業大学とその間28年でした。

いづれの大学、いづれの図書館におきましても、図書館員の方々からはもちろん、その大学構成員すべての方々から、温い気持の良いご交際を賜りました。特に終りの2年間、本学の図書館で皆様のおかげにより無事退職の日を迎える事が出来ました事は誠に有難い事であります。改めて厚くお礼申し上げます。

情報化時代をむかえ大学図書館も画期的な変革の時に臨んでいます。どうぞ今迄以上のご支援、ご協力を図書館に賜りますよう。

最後に皆様のご健康とご多幸をお祈りし、東京工業大学の一段の発展を心より祈念致しましてごあいさつとさせて載きます。

(附属図書館事務部長)

— おもいで —

三 浦 ヤエコ



時の流れは早いもので、私が東工大に昭和26年6月にお世話になり、はや33年余りを過ぎ定年を迎えることになりました。

思えば当時の保健部は本館3階の一室でした。28年に現在の場所で古いボロボロの建物に引越しました。それから東工大の発展につれ近代的で立派な姿に生まれ変わり、その名も保健管理センターとしてその機能も整いすばらしく明るい職場になりました。正に今昔の感を深くいたします。その間にあって私は職業柄いかにして悩める人々のお手伝いをすべきか、心をくだいてまいりました。時として急患が発生すれば、食事どころではなく一刻も早い快癒を祈ってまいりました。そして元気になられた姿を拝見するとき、まさに職業冥利を感じたものでした。

一番つらかった思い出は学園紛争でした。学生同志が血で血を洗うあの毎日、怪我人続出、なんとも言いようのない気持で看護に当たったものでした。私は戦時中、東大病院で山のような負傷者の看護に不眠不休で当たったものですが、あのつらい思い出も薄れ世の平和を感じていた時に、学園紛争でまた人が血を流す姿を見て非常に悲しい思いがしたものでした。これらの思い出は一生忘れることはできません。そしてそれなりに平和になった姿をいつまでも大切にしていきたいと願う一人なのです。

東工大の皆さま、本当に本当に有難うございました。厚くお礼を申し上げます。最後に東工大の益々のご発展と皆さまの御健康を心よりお祈り申し上げます。
(保健管理センター 看護婦)

退職によせて

鎌 田 和子



此の度の停年退職にあたり、無事仕事を全うし、退職できますことは、上司同僚の方々の御指導御協力の賜物と深く、感謝いたしております。

思えば工業教員養成所から厚生課に配置換えになって17年になります。

私は主に学生の下宿紹介、合宿研修施設(大洗、鹿沢、木崎湖)の事務を担当してきましたが、7、8年前までは、下宿もほとんどが3畳か4.5畳の貸間を借りる学生が多く、6畳の部屋を借りる学生は数えるほどでした。最近では6畳又は4.5畳のアパートを希望する学生が多く、貸間の部屋は無くなりつつあります。時節の移り変わりが、よく出て来ていると思います。

研修施設は、木崎湖及び大洗合宿研修所とも増改築がなされ、永い間待望の鹿沢合宿研修所も関係各位の御努力で改築され充実した立派な建物となって、来春は開館の運びになる予定です。このことは、研修施設の仕事の一端をたずさわっている者としても、うれしく思っております。施設の管理人の方々も皆さん真心をこめて気持よく仕事に従事されておられます。おかげでなに事もなく無事に過ぎ終えますことをあらためて感謝いたします。

おわりに東京工業大学の益々の御発展と、皆様方の御健康をお祈りいたします。永い間お世話になり、ありがとうございました。(教務部厚生課 事務官)

停年退官に寄せて

染谷 光春



60歳までの約半分余を東工大に勤務し、皆様の温かな御指導御支援の下で楽しく過して来られましたことを有難く心から御礼申し上げます。

私が採用された頃は現在の図書館、総合情報処理センターの処はテニスコートや草花が植えられて広々としていたのを覚えています。今は桜の木だけは昔と変わらず毎年きれいな花見をさせてくれます。その桜も今年花見も出来ないままに退職して行くことになるのが心淋しい気が致します。

早いもので10年1昔といいますが35年余りも勤務致し月日の立つのが夢の様でした。

職場の中も自動化されて今は能率も入所した頃と大分変りました。幸い岩下さんが昨年9月から配置換えで来てくれましたので後を引継いでくれることに成り喜んで居ります。

退職後は第二の人生を楽しく過せる様努力して行こうと思います。

最後に東工大の発展と皆様方の御健康をお祈り申し上げます。

(経理部経理課 印刷工)

退職にあたり想うこと

石橋 渡



35年勤めさせて頂いた東工大を去るに当たり懐旧の念ひとしほの昨今です。就職当時は、木の正門、木の“東京工業大学”の表記板、まだ焼夷弾の突き刺っていた地面、池の周囲の土のくずれかけた“ひよたん池”、

正面を入ると富士がくっきり眺められ、本館は迷彩がかけられ、実験室は殆んど鉄筋か白いモルタル塗の平屋であった。しかし最近、世の高度成長と学生数の増加と共に、古い実験室は取壊され、後には多くの高層建築が建ち、緑は少なくなり、変らぬのは、春の桜、銀杏並木、ヒマラヤ杉のようだと感じられます。在職35年は長くあったが、その間東工大も変貌しつづけたのを見て来まして、東工大も人間

の成長と同じく成長して来たんだなというのが実感です。その間、多くの方をお送りしたが、今度は到頭自分もかと思無量です。その間多くの知人も生まれ、また多くの先生より御指導、助言を数多く受け感謝します。私一人の知識や技術だけでは限られたものだと痛感しました。誰かが云った言葉か“老兵は死なず只消えるのみ”とか、これが実感です。長らく有難度うございました。

(工学部有機材料工学科 技官)

停年退職となり職場を去るに際して

渡辺 梅次郎



私は、東工大に昭和41年4月1日付で46歳にして初めて本採用の守衛として就職しました。幸いにして在職19年、停年までの間、学生紛争、鉄鋼線の盗難、研究室での盗難事件、火災、学生の部屋でのアルコール中毒、怪我人、救急車の要請等、その処置としていろいろな作業がありました。

採用当時、南門、西門の各守衛所は木造の建物であり、南門守衛所の暖房は火鉢に木炭でした。現在は各門とも鉄筋コンクリートの建物となり、守衛の服装も良くなり、守衛全員がネクタイをするようになり守衛の服装とともに人格的にも向上して参りました。これも上司の方々の御尽力によるものと思います。また、私は今日まで病気らしい病気もせず、停年まで勤め上げる事ができました。これも教職員の皆様の御芳情の賜と感謝致しております。停年退職後私は4月1日付で松風学舎の管理人として再就職することになりました。今後ともよろしく願い申し上げます。大岡山キャンパスを去るに当り、東工大の益々の御発展と教職員の皆様の御健闘と御健勝をお祈り申し上げます。

(経理部経理課 守衛)



大きくはばたけ室井! 2時間23分53秒を踏台に

橋本 巍洲

2時間23分53秒、これが復調なった室井道人君(総理工・エネルギー科学専攻博士後期課程2年)の昨年12月2日福岡国際マラソンにおける記録である。

彼は学部時代は東大駒場の教養学部に着籍を置き、四年間は陸上競技(マラソン)部の選手として活躍し、昭和56年4月、総理工・エネルギー科学の大学院へと進学してきた。学部時代の昭和55年12月7日、同じ福岡国際マラソンで樹立した2時間24分04秒の記録は、未だに東大陸上部の記録として、燦然と輝いており、以後の伸長が大きく期待されていた。

しかし人生、思い通りには進まないもの。二つの記録の差は11秒、四年間に11秒の短縮、これは彼にとっては全く不本意な成績であろうと思はれるが、この11秒には、彼の知らぬ苦闘の歴史が秘められている。

室井君が私の研究室に進学してきた時、彼には研究の面とマラソンとの両面から、大いなる期待がかけられた。彼の研究テーマは「高温磁気冷凍」。今でこそ我々東工大と東芝総研との共同研究グループは、ヘリウム液化磁気冷凍の研究で世界の最先端をつわ走っているが、当時は我々研究室で研究がスタートする時であり、苦闘の幕開けとも言うべき時期であった。

彼の担当は蓄冷方式の開発……磁気冷凍に欠かせぬ基本方式の開発である。化学系出身の彼にとっては、応用物理の基礎の勉強と研究と、そして、東工大⇄多摩川の間の往復20～30kmのトレーニングが欠かせぬ日課となった。

しかし順調に行くかに見えた修士2年の夏、突如体に変調を来たし、全く走れない日々が訪れた。そもそも、彼が走り始めたのは、小学生時代、「体の大きいいじめっ子に対抗するためのトレーニング」とやや不純(?)な動機からであったが、以来、毎日練習を繰り返すうち、生きることとマラソンとを切り離すことが出来なくなってしまっていた。その彼が走れなくなった時、彼は悩み、苦しみ、周囲の者が見るにしのびない状態が続いた。内科、スポーツ医学科、さらには神経科、精神科と彼の医者めぐりが続き、腹に贅肉がつき、往時の面影を全く失ってしまっていた。



福岡国際マラソンに於いて競技場を目前に疾走する室井君。

しかし人生とは面白いもの、ある医者苦しませるのビタミンの大量投与を行ったところ、今迄の原因不明の体調不調が見る間に薄れていった。室井君は、やっと復調のきっかけと博士進学とを手にすることができた。

博士進学後は、個人プレイに徹することが出来る「化合物半導体太陽電池材の開発」に研究テーマを変えると共に、20～40kmのマラソン練習が日課となり、徐々に調子を取り戻していった。博士2年になった昨年は、12回の大会に出場し、指宿および新潟マラソンで優勝、NHKパイロットマラソンで3位、玉造マラソン5位、富山マラソン7位の成績をあげ、着々と復調を果たしている。

「走ること」と「研究」とを両立させる為には、より恵まれた環境の方が望ましいには違いない。彼にとっては辛いこと(私には残念であるが)に、本年四月から、富士電機の総合研究所に就職することが決まった。残り一、二月で学生生活ともお別れである。通算8年間の学生生活で、フルマラソン(42.195km)出場回数41回という記録は、恐らく学生としては最多であろう。さらに人間である以上、好、不調の波はあるだろうに、その41回総て完走したという気力は並々ならぬものがある。

2時間23分53秒、学生最後のレースで復調なったところで、実社会にでて大いに活躍して欲しい。今からもう日に浮ぶ様である。かつて宵闇に包まれた東工大キャンパスを黙々とトレーニングに励んでいたと同様に、富士電機総合研究所近くの薄暮の三浦海岸を疾駆する姿が。

頑張れ室井! 人生の大きな目標に向かって力強くはばたけ!

(応用物理学科[エネルギー科学・協力講座] 助教授)

昭和59年度手島記念研究賞受賞者

昭和59年度手島記念研究賞の授賞式が、手島工業教育資金団により、去る3月13日(木)、創立八十年記念会議室において行われた。

同研究賞は、理工系大学における研究を奨励するために設けられているもので、研究論文賞、著述賞、

研究奨励賞及び発明賞の四種類である。

当日、受賞者に対してそれぞれ賞状ならびに副賞が授与された。なお、受賞者は以下のとおり。

(庶務部庶務課)

1. 研究論文賞 3件

受賞者	研究論文名
飯島 俊郎	高分子膜のイオン、溶質透過機構の研究 (J. Chem. Soc. Faraday Trans. I 80 2647 (1984) 他5編)
鳥山 保二夫 実吉 敬和 久武 和夫	A RETARDING-GRID ELECTRON SPECTROMETER FOR MÖSSBAUER SPECTROSCOPY
小安 林健 安田 二力	カテーテル先端型血圧計への光ファイバの応用に関する研究

2. 著述賞 2件

受賞者	著書名
橋本 巍洲	固体材料による新エネルギー変換技術
梅垣 壽春	確率論的エントロピー — 情報理論の函数解析的基礎I — 量子論的エントロピー — 情報理論の函数解析的基礎II —

3. 研究奨励賞 8件

部門名	受賞者	博士論文名
物理学部門	伊藤 順司	内部転換電子メスバウワー分光法による水素イオン注入希土類鉄ガーネット膜の研究
化学部門	築山 光一	LIF and Optical Double Resonance Spectroscopy of S ₂ O and NO ₂
"	萩原 啓実	Studies on Endothelial Cell (血管内皮細胞に関する生化学的研究)
材料工学部門	山口 周	Na ₂ Oを含むスラグの熱力学的研究
"	落合 鐘一	γ析出強化型合金の構成相の相安定性と機械的性質 — 耐熱合金の合金設計を目指して —
応用化学部門	小菅 人慈	濡れ壁塔による3成分系の蒸溜
電気・電子工学部門	水本 哲弥	導波路型光非相反回路の基礎的研究
建設部門	屋敷 和佳	都市における公共的生活環境施設の整備特性に関する基礎的研究

4. 発明賞 1件

受賞者	発明の名称
榎本 肇	シリアル信号の符号化方式

目標額12億円を突破 創立百年記念事業資金の 募金終了報告と御礼

東京工業大学創立百年記念事業資金募金の申込みを昭和59年12月31日をもって締切らせて戴きました。

昭和56年9月発足以来、厳しい経済情勢下にも拘らず、関係各位の深い御理解と熱い御協力とにより、昨年末までの申込金額は14億円を上廻り、目標額を2億円以上超えることが確実となりました。

ひとえに皆様の御尽力によるものと心から感謝致しております。

なお、締切時の募金申込状況は下記の通りであります。

		(内入金分)	
個人	6,514件	364,228,377円	363,858,877円
		(1件平均 40,600円)	
法人	317件	1,048,365,000円	997,865,000円
合計	6,831件	1,412,593,377円	1,361,723,877円

- (注) 1. 入金額は昭和59年12月31日現在
2. 上記の他、ソニー(株)からビデオ装置10組の寄贈を受けている。

また、創立百年記念事業のうち、国際学術交流基金については、3億円をもって国債を購入しその果実によって運営されており、既に2回の募集を行い、本学教職員の海外派遣、外国人研究者の招へい、本学の学生及び外国人留学生に対する援助が、それぞれ実施されております。なお、目標額を超えた資金のうち1億円を更に国際学術交流基金に上乘せすることを目下検討しており、出来る限り多くの方々の御希望に添えるよう努力するつもりです。

百年記念館は、基本設計がほぼ出来上り年内には着工の予定です。発行が遅れております百年史も、いよいよ印刷の段階に入りました。

募金の経緯につきましては、いずれ稿を改めまして詳細な報告を致しますが、とりあえず百年記念事業の近況をお知らせいたしますと共に、皆様方の御協力に深く感謝し、厚く御礼申し上げます次第です。

清水二郎 (募金会専務理事)

皆さん、ご存知ですか 大岡山・長津田地区間の 内線電話のかけ方

既に、東京工大クロニクルNo.162でご案内のとおり、大岡山地区と長津田地区間の構内電話専用線の

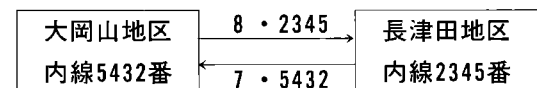
開通により、両地区間の内線電話の相互通話が、電話交換手を経由しないで、ダイヤル操作だけで接続されます。

但し、両地区間の専用線は6回線ですから全回線話中の場合も予想されますのでご了承願います。

なお、この方法は1日中(24時間)全ての内線電話から使用できますので、両地区間の内線電話相互通話の効率化のためおおいにご利用下さい。

〔ダイヤル操作手順例〕

1. 大岡山地区の内線電話から長津田地区の内線電話2345番にかける場合
8・2345とダイヤルすると通話ができる。
2. 長津田地区の内線電話から大岡山地区の内線電話5432番にかける場合
7・5432とダイヤルすると通話ができる。



- (注) (1) 8(大岡山地区→長津田地区)又は7(長津田地区→大岡山地区)のダイヤル後に発信音(短かい継続音)が出ますので、この音を確認してから内線電話番号をダイヤルして下さい。
(2) この大岡山・長津田地区間の内線電話のかけ方については、東京工業大学電話帳にも掲載されています。

(施設部設備課)

◆ 謹 告



資源化学研究所助教授上野芳男氏は、病氣療養中のところ、2月27日急逝されました。享年40歳でした。ここに深く哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

同氏は昭和42年に本学応用化学科を卒業、47年本学助手、60年助教授になられ現在に至っていました。専門は有機合成化学、高分子合成。

東京工大クロニクル No.177

昭和60年3月26日

東京工業大学広報委員会 発行©

東京都目黒区大岡山2-12-1 〒152

電話 03-726-1111 内線2032